

アブラツノザメ 日本周辺

(North Pacific Spiny Dogfish, *Squalus suckleyi*)



最近の動き

2017 年の我が国周辺のアブラツノザメの推定漁獲量は 3,100 トンであり、近年の漁獲量は横ばい傾向で推移している。近年、沖合底びき網漁業（以下、沖底）の標準化 CPUE は横ばい、アブラツノザメの主分布域である津軽海峡周辺の底はえ縄漁業の標準化 CPUE は減少傾向にあるが、津軽海峡の減少については長期的な増減から判断して変動の範囲内と考えられる。

利用・用途

第 2 次世界大戦前後は、ビタミン A、肝油の原料としてかなりの需要があったが、合成ビタミン A の普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した。東北地方では刺身や煮物、照り焼きなどで食されるほか、ちくわなどの練り製品原料として利用される。また、近年、肝油や軟骨エキスなど健康補助食品の原料の一つになっている。

漁業の概要

アブラツノザメは多くの統計資料でさめ類として他種と一括して扱われているため、単一種としての漁獲量は明確ではない。1953～1967 年の一時期にのみ都道府県別のアブラツノザメの漁獲統計が整備されていたことから、これらから都道府県別にさめ類の漁獲量に占めるアブラツノザメの割合を求め、各年のさめ類漁獲量からアブラツノザメの漁獲量を推定することができる（図 1）。この推定漁獲量と文献情報とをあわせ、以下にアブラツノザメの漁業及び漁獲の概要をまとめた。

アブラツノザメは北日本の太平洋側や日本海側では、かなり古い時代から漁獲されていたものと思われる。本種が漁獲対象として注目されるようになったのは明治 30 年代末頃からであり、北海道、青森、秋田、石川県などで当初はマダラなどを対象とした底はえ縄漁船の兼業対象種として漁獲された（田名部ほか 1958）。昭和初期になると、機船底びき網でアブラツノザメを漁獲するようになったが、第 2 次世界大戦頃には資材の不足により底はえ縄による漁獲が主体となった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い主に機船底びき網により積極的に漁獲されるようになり、1952～1955 年の平均漁獲量は 42,000 トンに達した。その後、本種の漁獲量は、1950～1960 年代の合成ビタミン A の普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。

現在、本種の主な漁獲は、以前に比べて同種を主対象とした操業が減少した沖底と本種を漁獲対象とする底はえ縄漁業により行われており、推定漁獲量は 1990 年以降 2,900～4,600 トンで比較的安定して推移しており、2016 年および 2017 年はともに 3,100 トンであった。

近年の推定漁獲量の 25%程度を占める青森県の漁獲統計では、さめ類としての集計しかないが、その中にアブラツノザメが多く含まれると考えられる。そこで、漁獲統計資料の漁業種別魚種別漁獲量から、まぐろはえ縄など表層性のさめ類を多く含むと考えられる漁法を除いた数値をアブラツノザメの漁獲量と推定して集計したところ（図 2）、1971 年以降、アブラツノザメと考えられるさめ類の漁獲量は増加し、1976 年には 3,300 トン程度となった。1980 年代及び 1990 年代の漁獲量は若干減少して 1,100～2,500 トン程度でほぼ横ばいで推移し、2004 年には 740 トンに減少した後、2005 年以降増加に転じた。2017 年の漁獲量は合計 1,218 トン

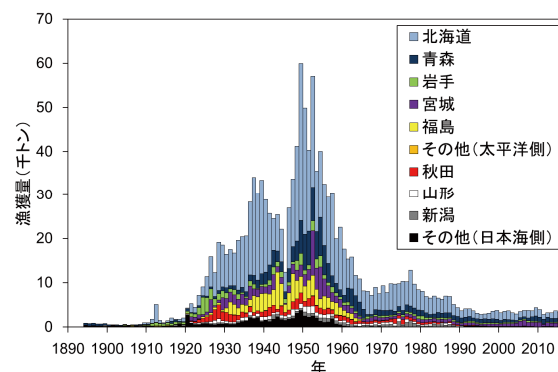


図 1. さめ類漁獲量から推定したアブラツノザメの漁獲量

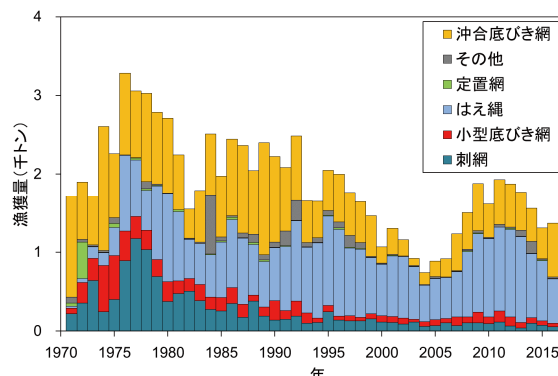


図 2. 青森県におけるさめ類の漁獲量（まぐろはえ縄、流し網を除く、1971～2017 年）

1971～2002 年は青森県漁業の動き、2003 年以降は青森県海面漁業に関する調査結果書（属地調査年報）より作成。

で、ここ数年はやや減少傾向が認められる。沖底で 610 トン（50%）、底はえ縄で 460 トン（38%）と、アブラツノザメを狙って操業している底はえ縄と規模の大きい沖底の漁獲量が大きな割合を占めている。

生物学的特性

【分布】

北太平洋のアブラツノザメについて、形態学的・遺伝学的な比較により北太平洋以外の *Squalus acanthias* と別種の *S. suckleyi* であるとする報告がなされたため (Ebert *et al.* 2010)、本報告では日本周辺のアブラツノザメを *S. suckleyi* として扱った。

北太平洋の陸棚域全域に広く分布し (阿部 1986、図 3)、日本周辺とアラスカ湾東部沿岸域は本種の重要な生息海域にあたる (Yano *et al.* 2017)。東北、北海道の沖合に多く、太平洋側では千葉県以北、日本海側では日本海の西部まで生息している (吉田 1991)。東北地方の太平洋側では水深 150 ～ 300 m に分布する。沖底による緯度経度 10 分メッシュの漁獲量分布をみると、太平洋側、日本海側ともに東北地方北部に漁獲の多い場所が集中しており、なかでも青森県の津軽海峡周辺での漁獲が多い (図 4)。このことから、近年の本種の主分布域は津軽海峡周辺と考えられる。

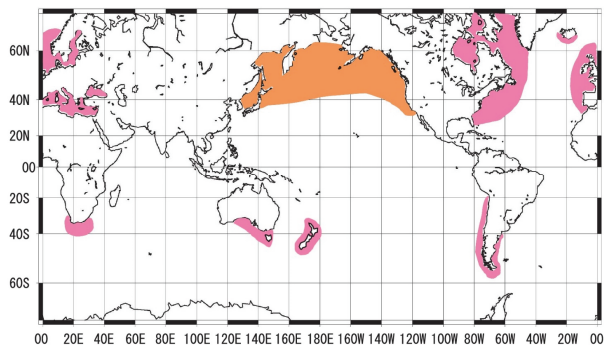


図 3. アブラツノザメ類の分布 (阿部 1986 を改変)
オレンジ色: *Squalus suckleyi*、ピンク色: *S. acanthias*。

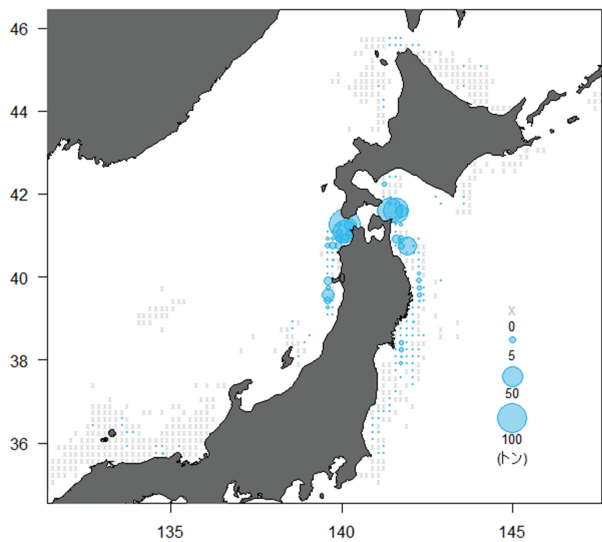


図 4. 2011 年の沖合底びき網漁業によるアブラツノザメの漁獲量分布

【産卵・回遊】

本種は胎生で、妊娠期間は 20 ～ 22 か月と長く、全長 30 cm 程度に成長した胎仔は 2 ～ 5 月に産出される (吉田 1991)。日本周辺では、1950 年代以前に日本海側と太平洋側のそれぞれにおいて、秋冬に南下し、春夏に北上する群れが存在したとの報告がなされているが (田名部ほか 1958)、近年の移動回遊が昔と同じかは明らかとなっていない。北太平洋では、1978 ～ 1998 年にカナダ太平洋岸で標識放流されたアブラツノザメ約 71,000 個体のうち、30 個体が日本周辺海域で再捕されており (McFarlane and King 2003)、本種は北太平洋を広く移動していると推定されるが、日本周辺から標識放流した個体の北米西岸での再捕記録は現在のところ得られていない。そのため、日本周辺と北米を往来しているのか、北太平洋で 1 つの系群なのか東西で異なるのかなどは明らかではない。

北日本の沿岸域でも出産すると推定されるが、繁殖場は特定されていない。

【成長・成熟】

カナダのブリティッシュコロンビア州沿岸水域では生後 30 年で雄は全長 90 cm、雌は 1 m に達し、雌は 60 歳以上になる (図 5、表 1)。成熟年齢は、雌では生後 23 年 (全長約 90 cm)、雄では生後 14 年 (全長約 70 cm) である (Ketchen 1975)。

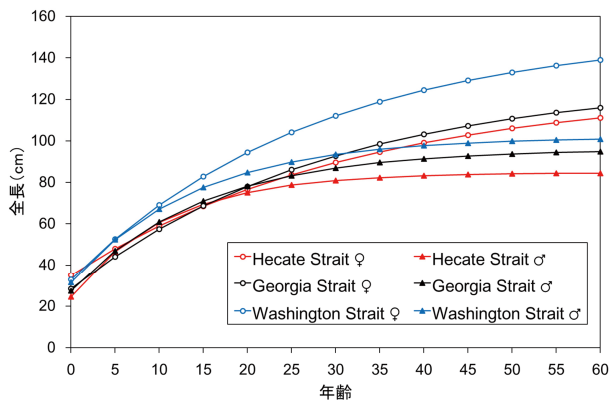


図 5. カナダ西岸のアブラツノザメの雌雄別海域別年齢－全長関係 (Ketchen 1975 より作成)

表 1. カナダ西岸のアブラツノザメの雌雄別海域別年齢－全長関係式 (Ketchen 1975)

Hecate Strait	
Female	$L_t = 125.1(1 - e^{-0.031(t+10.6)})$
Male	$L_t = 84.7(1 - e^{-0.092(t+3.7)})$
Georgia Strait	
Female	$L_t = 129.1(1 - e^{-0.034(t+7.3)})$
Male	$L_t = 96.1(1 - e^{-0.067(t+5.0)})$
Washington coast	
Female	$L_t = 152.9(1 - e^{-0.036(t+6.7)})$
Male	$L_t = 101.8(1 - e^{-0.071(t+5.2)})$

【食餌・捕食者】

主に魚類および頭足類を捕食し、サケやマダラなどの有用魚種も捕食する (Sato 1935、三河 1971)。我が国周辺では、東北地方の太平洋岸沖でマダラの胃内容物として出現したことが報告されている (橋本 1974)。

資源状態

【漁獲圧の動向】

本種を対象とした漁獲統計が存在しないことから、漁獲量の大部分を占める太平洋北区の沖合底びき網 1 号びき操業のかけまわしの有漁網数および津軽海峡で操業する青森県の底はえ縄漁船の延べ操業隻数の推移から漁獲圧の動向を示す。

太平洋北区において、尻屋崎海区のかけまわしでは、1980 年以降のアブラツノザメの有漁網数は増減を伴いながら横ばい、あるいはやや増加傾向で推移している (図 6)。襟裳西海区では、1998 年以降、減少傾向にあるが、これは、八戸船籍の沖底船の操業が襟裳西海区よりも近海の尻屋崎海区で増加したためである。2017 年の有漁網数は、尻屋崎海区で 3,100 回と前年よりやや減少し、襟裳西海区では 1,200 回と増加した。岩手海区のかけまわしの有漁網数は大きく減少しているが、これは、かけまわしから 2 号びきへの転換が進んだためである。1999 年以降は 1,000 回前後で安定していたが、2011 年には東日本大震災の影響により 390 回に

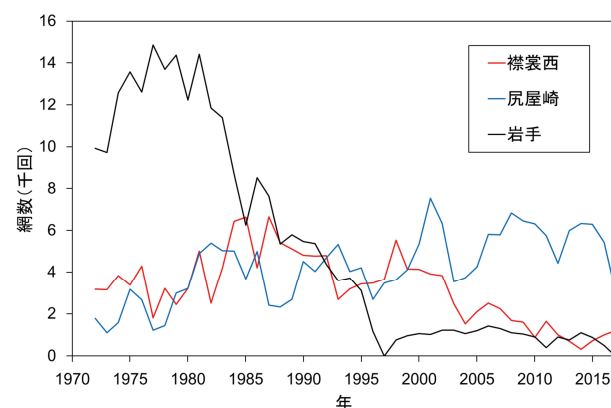


図 6. 太平洋北区における沖底（かけまわし漁法）の有漁網数（アブラツノザメが漁獲された操業日の網数）の推移

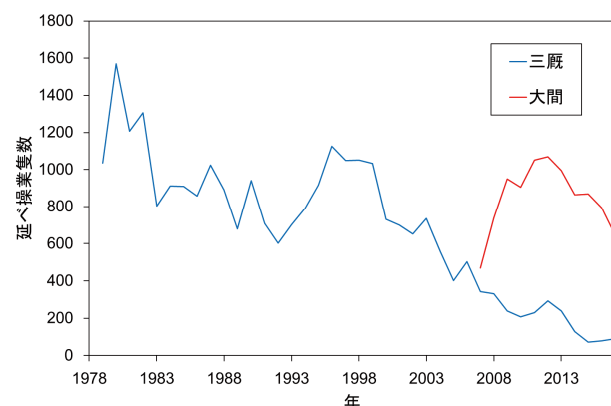


図 7. 青森県主要港（三厩及び大間）における底はえ縄の出漁隻数の推移

減少した後、2016 年には 500 回となり、2017 年には 0 回となっている。これらから、太平洋北区のかけまわしの漁獲努力量は、全体としては増減を伴いつつ減少傾向と判断される。

津軽海峡において、三厩では、漁業者の減少により、底はえ縄の努力量は 1996 年の 1,100 隻から減少傾向にある (図 7)。しかし、アブラツノザメは安定した漁獲が期待できることから、大間では、近年、本種を漁獲対象とした底はえ縄の努力量が増加している。

【資源の動向】

資源状態の指標値として、1972 年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかけまわし (1 号びき沖底) の CPUE と、主要な漁場である津軽海峡における 1979 年以降の青森県の底はえ縄による漁獲量および延べ操業隻数から求めた CPUE を用い、資源の動向を検討した (図 8、図 9)。各漁法の CPUE において、季節及び海域の特異的な影響を除去して資源状態の年トレンドを抽出するため、一般化線形モデル (GLM) による標準化を行った。なお、太平洋北区のかけまわしでは、様々な魚種を漁獲対象として操業するため、標準化の際には、どの魚種を狙った操業なのかの影響も考慮

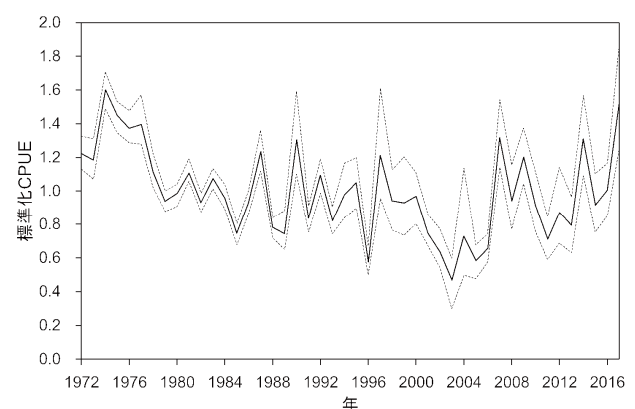


図 8. 太平洋北区における沖底（かけまわし漁法）の標準化 CPUE
標準化 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線は 95%信頼区間の上限値と下限値。

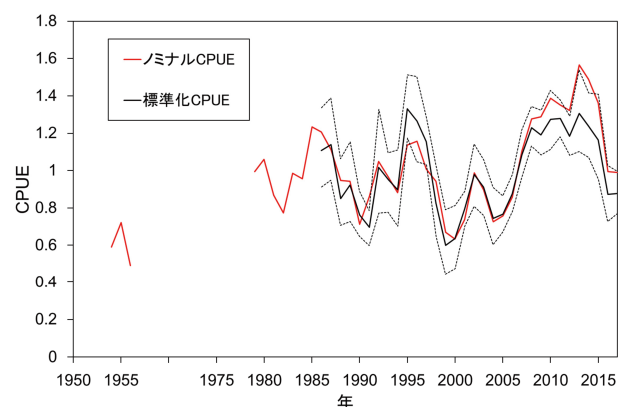


図 9. 津軽海峡内で操業を行う底はえ縄のノミナル CPUE（標準化されていない CPUE）と標準化 CPUE
1986～2012 年の三厩および 2007～2017 年の大間の漁獲データを用いた（各 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線は 95%信頼区間の上限値と下限値）。1957～1978 年のデータはない。

した。

太平洋北区の沖底では 3 つの漁法による操業が行われている。青森県ではかけまわし、岩手県では 2 そうびきとかけまわし、宮城、福島、茨城、千葉の各県ではオッターロールであるが、アブラツノザメの漁獲が多いのは襟裳西～尻屋崎海区で操業する青森県のかけまわしである。かけまわしによる CPUE は 1972 年以降 2000 年ごろまで減少傾向が認められたが、それ以降は近年に至るまで概ね横ばい傾向にある（図 8）。また、分布域の中心にあり、アブラツノザメを狙った操業が行われている津軽海峡内の底はえ縄では、近年の CPUE が 2000 年代前半の約 140% の水準を示しているが（図 9）、過去 5 年の CPUE には減少傾向が認められる。さらに、底はえ縄の 1979 ～ 2017 年のノミナル CPUE（標準化されていない CPUE）は、1954 ～ 1956 年と比較し高い水準にある。

太平洋北区のかけまわしの CPUE 及び日本周辺海域において本種の分布の中心に近いと想定される津軽海峡内で本種を漁獲する底はえ縄漁業の CPUE の解析結果から判断すると、日本周辺における近年のアブラツノザメ資源は中位水準にあり（CPUE の過去最大と 0 を 3 等分し、上から高位、中位、低位とした場合、かけまわしおよび底はえ縄の CPUE はともに中位と評価）、東北太平洋側では増加傾向、津軽海峡では減少傾向と判断されるが、津軽海峡の減少については長期的な増減から判断して変動の範囲内と考えられる。

管理方策

津軽海峡で操業を行う底はえ縄漁業者により小型魚や出産への貢献度が高いと考えられる高齢魚の再放流および漁獲量上限の設定など、資源保全に向けた自主的な取組が行われているが、公的な管理方策は実施されていない。なお、2007 年のワシントン条約第 14 回締約国会議及び 2010 年の第 15 回締約国会議では EU から附属書 II への掲載が提案されたが、いずれも採択されず、その後掲載提案は行われていない。

執筆者

かつお・まぐろユニット

かじき・さめサブユニット

東北区水産研究所 資源管理部 底魚資源グループ

成松 庸二・* 矢野 寿和・柴田 泰宙

* 現所属：水産大学校 海洋生産管理学科 資源管理学講座

参考文献

- 阿部宗明（編・監修）. 1986. 決定版生物大図鑑 魚類. 世界文化社, 東京. 431 pp.
- 青森県農林水産部. 2003-2017. 青森県海面漁業に関する調査結果書（属地調査年報）.
- Ebert, D.A., White, W.T., Goldman, K.J., Compagno, L.J.V., Daly-Engel, T.S., and Ward, R.D. 2010. Resurrection and redescription of *Squalus suckleyi* (Girard, 1954) from the North Pacific, with comments on the *Squalus acanthias* subgroup (Squaliformes: Squalidae). *Zootaxa*, 2612: 22-40.

- 橋本良平. 1974. 東北海区漁場におけるマダラの食性と生息水深の変動に関する研究. 東北区水産研究所研究報告, 33: 51-67.
- Ketchen, K.S. 1975. Age and growth of dogfish *Squalus acanthias* in British Columbia waters. *J. Fish. Res. Board Can.*, 32: 43-59.
- McFarlane, G.A., and King, J.R. 2003. Migration patterns of spiny dogfish (*Squalus acanthias*) in the North Pacific Ocean. *Fish. Bull.*, 101: 358-367.
- 三河正男. 1971. 底生性サメ類の食餌. 東北区水産研究所研究報告, 31: 109-124.
- 農林省農林経済局統計調査部. 1952-1963. 漁業養殖業漁獲統計表.
- 農林省農林経済局統計調査部. 1964-1972. 漁業養殖業生産統計年報.
- 農林省農林経済局統計情報部. 1973-1977. 漁業養殖業生産統計年報.
- 農林水産省農林経済局統計情報部. 1978-1988. 漁業養殖業生産統計年報.
- 農林水産省農林経済局統計情報部. 1989-2001. 漁業・養殖業生産統計年報.
- 農林水産省統計部. 2002-2017. 漁業・養殖業生産統計年報.
- 農商務省. 1894-1923. 農商務統計表.
- Sato, S. 1935. A note on the Pacific dogfish (*Squalus suckleyi* Girard) in the coastal waters of Hokkaido, Japan. *J. Fac. Sci. Hokkaido Imp. Univ. Ser. 6, Zoology*, 43: 127-141.
- 田名部正春・福原 章・菅野嘉彦・鶴川正雄・遊佐多津雄・小島伊織・長峰良典. 1958. 対馬暖流開発調査報告書, 第 4 号. 水産庁, 東京. 84 pp.
- 東北区水産研究所（編）. 1971-2017. 太平洋北区沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計資料. 東北区水産研究所, 塩釜.
- 東北農政局青森統計情報事務所. 1971-2002. 青森県漁業の動き.
- Yano, T., Ohshimo, S., Kanaiwa, M., Hattori, T., Fukuwaka, M., Nagasawa, T., and Tanaka, S. 2017. Spatial distribution analysis of the North Pacific spiny dogfish, *Squalus suckleyi*, in the North Pacific using generalized additive models. *Fish. Oceanogr.*, 26: 668-679.
- 吉田英雄. 1991. アブラツノザメ. In 長澤和也・鳥澤 雅（編）, 北のさかなたち. 北日本海洋センター, 札幌. 6-7 pp.

アブラツノザメ（日本周辺）の資源の現況（要約表）

資 源 水 準	中位
資 源 動 向	増加（東北太平洋側） 減少（津軽海峡）
世 界 の 漁 獲 量 （最近 5 年間）	—
我が国の漁獲量 （最近 5 年間）	3,070 ～ 3,633 トン※ 最近（2017）年：3,070 トン 平均：3,274 トン （2013 ～ 2017 年）
管 理 目 標	検討中
資 源 評 価 の 方 法	かけまわしおよび底はえ縄の CPUE により水準と動向を評価
資 源 の 状 態	検討中
管 理 措 置	検討中
管理機関・関係機関	なし
最新の資源評価年	—
次回の資源評価年	—

※漁獲量は全国のおさめ類漁獲量と過去のおさめ類に占めるアブラツノザメの平均的な割合から推定した値（2017 年は暫定値）